

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Acculturation : The Pacific Islands Records of Japanese Castaways during the Edo Period

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石川, 榮吉 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003744

江戸時代漂流民によるオセアニア関係史料

石 川 榮 吉*

- | | |
|--------------------|---------------|
| I. 異文化体験者としての漂流民 | 4. 長者丸関係 |
| II. 漂流の記録 | 5. 中吉丸関係 |
| III. 人類学資料としての漂流記録 | 6. 土佐国漁船関係 |
| IV. オセアニア関係漂流史料 | 7. 榮寿丸(永住丸)関係 |
| 1. 若宮丸関係 | 8. 天寿丸関係 |
| 2. 稻若丸関係 | 9. 永力丸(榮力丸)関係 |
| 3. 神社丸関係 | |

I. 異文化体験者としての漂流民

海外渡航を禁じられていた鎖国時代の日本人のうちにも、異国体験をもったものがまったくいなかったわけではない。幕末動乱の時期ともなると、幕府から公式に派遣された遣米使節団(万延元年〔1860〕)や遣欧使節団(文久2年〔1862〕)、あるいは榎本武揚らのオランダ留学生(同上年)などのほかにも、幕府には内密に、いわば密航のかたちでイギリスに留学した長州藩の井上馨、伊藤博文ら(文久3年〔1863〕)や薩摩藩の新納刑部、五代友厚など(慶応元年〔1865〕)がある。

これらの人びとのばあいは、時代がすでに開国へ向けて大きく動き始めていた状況のなかでの海外渡航であり、しかも意図的・計画的な出国であった。しかし、こうした人びとは別に、そのかなり以前、まだ鎖国という幕府の祖法が厳として生きていた時代にも、異国体験をした日本人がいたのである。漂流民あるいはたんに漂民と呼ばれる人びとがそれである。

四面環海の日本列島のことであるから、たとえば、すでに先土器時代に、神津島産の黒曜石が本州に運ばれていたことでも示されるように、日本人の海上交通の歴史は、日本人の歴史と同じだけの古さをもつといってよい。海上交通があれば、とうぜん海難事故もあったわけで、科学技術の発達したこんにちでさえ、海難事故があとを絶たないのであるから、古来どれほどの海難事故があったものか、その総数にはおそ

* 中京大学社会学部

らく想像を絶するものがある。海難事故に遭遇したもののうちには、漂流して異国に漂着したとか、異国船に救助されたとかいうものも、とうぜんあったはずであるが、これら漂流民のばあいには、なんらかの幸運に恵まれて生還でもしないかぎり、その漂流の事実さえもが故国に知られる機会はまずなかった。こうして、故国の誰にも知られることなく異郷の土と化した漂流民も、けっして少なくなかったことであろう。

古くから繰返されてきた海難事故ではあるが、その件数が急増し、漂流事件もまた増加してくるのは、近世以降のことである。これは、このころになると記録がだいふ整備されてきたという事情もあるが、なんといっても最大の理由は、国内の流通経済が発達し、海運が盛んになったことである。海運が盛んになったにもかかわらず、造船を含めて航海術が幼稚であり、気象・海況を読む術も未熟であったところから、海難事故が頻発するようになったわけである。

漂流の記録がこれまでになく増加してくるのは、生還者がそれだけふえたということにはほかならない。これには、国際環境の変化が大きくあざかっている。漂着した先で、破船を修理するとか、あるいは新たに船を造るとかして帰還した例もないではないが、漂流中を異国船に救助されたり、漂着先で異人に助けられたりしたすえ、異国船に送られて帰国をはたしたという例が、圧倒的多数を占めているのである。これは、日本近海に出没する異国船の数が増したこと、日本に開国を迫る海外諸国が、漂流民護送をその手段として利用しようとしたこと、といった国際情勢から結果したことであった。

異国船が日本近海にしきりに姿をあらわすようになったのは、太平洋捕鯨の盛況と、広東市場を対象とする太平洋貿易の殷賑による。太平洋の「探検時代」がほぼ終了する18世紀の終りごろから、太平洋の資源開発と対広東貿易が始まる。たとえば、北米北西岸とハワイ諸島についての、キャプテン・クックの最初の報告書が出版されたのが1784年のことであるが、その出版後1年をまたずに、利にさといイギリス商人が、早くもクックの情報にもとづいて北米北西岸でラッコ猟を行ない、その毛皮を広東市場へ売り込んでいる。こうして太平洋を越えての毛皮貿易が始まるのである。白檀・いりこ（干シナマコ）・真珠貝などの太平洋諸島の産物がこれに続く。太平洋を航行する貿易船の数が年ごとに増大する。だが、貿易にもまして活況を呈したのが、太平洋捕鯨である。

クックの報告以前には、捕鯨の主舞台は大西洋であった。それが太平洋に移り、1789年から1850年代まで、捕鯨業は全太平洋の商業活動の中で最大の利益をもたらすものとなる。主役はアメリカの捕鯨船であった。「われわれの捕鯨船隊は、太平洋を

その帆で白一色に埋めつくしていると言ってよかろう」という、当時の一アメリカ人の言葉が伝えられている [Howe 1984: 93]。アメリカの捕鯨船の数は、1835年(天保6年)で421隻、1847年(弘化4年)には729隻をかぞえ、そのほとんどすべてが太平洋で操業していたのである [桑田 1940: 33-37]。漁場は初めカリフォルニア、チリー、ニュージーランド沖であったが、ついで赤道付近、そして1820年代には日本近海に新漁場が発見される。このようにして、19世紀の日本近海には、しだいに異国船の航行がふえ、これに発見・救助されるという幸運が、日本人漂流民にしばしば恵まれることとなったのである¹⁾。

異国に漂着したばあいはもとよりのこと、異国船に拾われたばあいでも、直接日本に送還されることは稀で、いったんは異国に運ばれるのが常であったから、期間に長短はあるものの、漂流民は異国生活を味わっている。鎖国時代の日本人としては、稀有の体験をしたわけである。したがって、生還した彼らがもたらす海外情報は、為政者や知識人にとってすこぶる貴重なものであった。その評価は、幕末開国問題が深刻化するにつれていよいよ高まり、漂流民のなかには、土佐の中浜万次郎(ジョン・万次郎)のように、幕臣にまで取立てられるものさえでてくるありさまであった。

Ⅱ. 漂流の記録

鎖国体制下では、たとえ不可抗力の漂流であっても、国外に出ることは違法行為であった。したがって、生還者は郷里に帰り着くまでに、繰返し嚴重な取調べをうけた。原則としてまず長崎奉行所で糺問をうける。そのあと、生国の藩から引取り人がきて藩に引取られるが、ここでまた藩役人が取調べる。生還漂流民が長崎以外の地に上陸したばあいには、まずその地の代官所や奉行所で取調べをうけたのち、長崎または江戸に送られ、そこで再吟味をうける。生国に引取られたのちにもまた、藩役人の取調べがある。このように二重、三重の取調べをうけ、そのつど訊問調書がとられるのである。その調書が「口書」といわれるもので、これにはごく事務的に漂流から帰還までの経過を述べたものから、漂流民の異国での見聞や体験を、かなりこと細かに写しとったものまでである。このあと述べる「漂流記」に劣らぬ史料価値をもつものである。

漂流民が前記の「口書」とは別に、他人の求めに応じてその数奇な体験を物語ることがある。これを聞き手がまとめたものが、「漂流記」と一般に呼ばれているもので

1) 川合彦充氏によれば、太平洋を漂流中に外国船に救助された日本船は、明治初年までに30隻をかぞえ、救助船の国籍の判明したものが27隻、そのうち21隻がアメリカ船であったという [川合 1967: 149-155, 1968: 251-252]。

ある。漂流民自身によって著された「漂流記」の例はきわめて乏しい。これは、漂流民が一般に有識階級ではなく、文章を作ることに不馴れな人びとであったからである。浜田彦蔵（アメリカ彦蔵）の自著とされる『漂流記』にしても、実際の執筆者は岸田吟香と本間清雄であったろうといわれている [近盛 1963: 248-251, 1980: 228]。

ところで、「漂流記」と称されるものにも、その成り立ちによって官撰本と私撰本との二種類がある。前者は藩侯もしくは幕府の命により、然るべき学者が漂流民の聞き取りを行ない、これを編纂して一書にまとめ、藩侯あるいは幕府に献上したものである。幕命により、伊勢の漂流民大黒屋幸太夫の体験談をまとめた、桂川甫周の『北槎聞略』（寛政6年〔1794〕）や、仙台藩命で若宮丸の漂流一件を大槻玄澤が編纂した『環海異聞』（文化4年〔1807〕）などが、その代表例である。こうした官撰本のばあいには、「漂流記」とはいても、漂流民の語ったところをそのまま文章化したとか、簡単な整序・配列を試みたというのとは異なり、当時入手できた蘭書の記述などと対照して、かなり厳密な校訂をほどこして編纂されている。

これに対して私撰本は、海外事情に関心を抱いた知識人、あるいは奇談好みの物好きが、直接漂流民の話を書くか、「口書」類をひそかに写すかしてまとめたものであり、整序・配列に多少の工夫をこらすことはあっても、前者のように厳密な校訂をほどこしたものはない。それだけに、ときに意味不明や前後矛盾する箇所もないではないが、なまなましきという点では官撰本にまさっている。

官撰本にしても私撰本にしても、「漂流記」で江戸時代に版行されたものは、きわめて稀である。元・気象研究所長で漂流記研究家の荒川秀俊氏によれば、枝芳軒著『南瓢記』（寛政10年〔1798〕刊）、青木定遠著『南海紀聞』（文化14年〔1817〕刊）、鈍通子記録『漂流記（大日本土佐国漁師漂流記）』（嘉永6年〔1853〕刊）、靄湖漁叟撰『海外異聞、一名壘墨利加新話』（嘉永7年〔1854〕刊）、彦蔵著『漂流記』（文久3年〔1863〕刊）の5種類しかないという [荒川 1969a: 188]。これはいうまでもなく、幕府が鎖国政策の延長として、「漂流記」の公刊を禁じていたからにほかならない。したがって、上記5種類の版行本は、いわば地下出版本であったわけで、たとえば鈍通子記録『漂流記』には、その末尾近くに、「右漂流譚一巻好古の友人におくり、売買を禁じ深く秘す」と記されている。

このようなわけで、「漂流記」の多くは写本の形で世上に流布した。流布したといっても、「流布」という言葉を用いることが不適當であるくらい、かぎられたものであったのかもしれないが、それでもこんにち、国会図書館をはじめ全国各地の図書館に、その種の写本が相当数収蔵されているし、個人の蔵書中に収められているものも、

かなりあるのではないかと思われる。

「漂流記」の原本もしくは写本が公刊されるようになったのは、明治以降のことに属する。とくに石井研堂、荒川秀俊、池田皓の諸氏により、多くの「漂流記」が翻刻・集成され、こんにちでは、主要な「漂流記」の多くを活字本で読むことが可能となった。なお未公刊のものがあるとはいえ、三氏の労には大いに感謝しなければならない。本稿でこのあと取りあげる史料は、すべてこの種の公刊本によったものである²⁾。

Ⅲ. 人類学資料としての漂流記録

前節に述べた漂流民の「口書」や「漂流記」の類は、たんに歴史学の史料としてばかりでなく、人類学的にもまた少なからぬ資料価値をもつものである。その一つは民族誌的価値である。漂流民は、漂流の結果はからずも訪れることとなった異国での見聞や体験を語っており、その中には衣・食・住をはじめとする風俗・習慣・生業・社会制度などの民族誌的事項がしばしば含まれているからである。もちろん、滞在期間の長短、漂流民自身の観察力や関心のあり方、あるいは記録者の取捨選択などによって、記録に精粗があるし、また漂流民の誤解、きき誤り、記憶違いなどによる誤りもあるが、注意深く扱かうならば、漂流民が訪れた当時のその土地の民族誌資料として、十分に活用することができるはずである。われわれは民族誌資料として、人類学者の調査報告とともに、しばしば昔の旅行者や宣教師の日記、旅行記の類を利用するが、異民族・異文化について明治前の日本人のその種の記録を利用することは、これまでごく稀にしかなされなかった³⁾。明治前の日本が鎖国体制下にあったことを思えば、

2) 史料の翻刻を別にして、日本人の漂流問題一般をあつかった書物に[相川 1963]、[鮎沢 1956]、[荒川 1964, 1969b]、[川合 1967] などがある。これらには、有名な漂流事件の幾つかの簡単な紹介もせられている。相川氏および川合氏の著書のそれぞれの巻末には、漂流事件の年表が付されている。川合氏のものの方が、やや詳しく、かつ正確であるが、ただし、それぞれの漂流事件についての依拠史料の明示は、相川氏にあって川合氏にはみられない。年表といえ、古くは嘉永7年(安政元年 [1854])に版行された芥子屋重兵衛著『海外漂流年代記』、華徠外史著『萬国渡海年代記』がある。両著とも、海外交渉一般の年表であって、幕末期ならではの出版物といえよう。漂流事件ももちろん取りあげられているが、ただし、かなり杜撰である。両著とも小野忠重氏によって翻刻されている [小野 1942]。

近年好んで漂流事件を題材とした作品を発表している文筆家に、春名徹氏がある。氏の作品は、漂流問題一般を論じたものではなく、特定の漂流事件を国際的な時代背景のもとに描いたものである。一般向きに平明な文章で書かれているが、そのじつ、執拗なまで丹念に内・外の文献を渉猟し、それらの厳密な考証のうえに立っており、内容的にはすぐれた学術書である [春名 1979, 1981, 1982]。

3) 従来この種の記録の利用は、歴史家と作家(井伏鱒二、井上靖、三浦綾子、吉村昭の諸氏など)にかたより、その他では言語学分野で村山七郎教授の有名な業績 [村山 1965] があるものの、なぜか人類学には少なかった。もっとも、まったく無かったわけではない。たとえば近年には、加藤九祚教授の北東シベリア諸民族に関する大作がある [加藤 1986]。

当然ともいえるが、乏しいとはいえ、利用できる資料があるのに、これを活用しないことは、いかにも惜しいと思うのである。

たとえば、かつてハワイに行なわれていた欠歯の習俗について、1822年から24年までその地に滞在した、ロンドン伝道協会の宣教師ウィリアム・エリス師が、「キリスト教が普及した現在にはもう行なわれていない」[ELLIS 1969: 182]と述べているのに対して、1839年から40年にかけておよそ11カ月間をハワイに滞在した、長者丸の漂流民の一人次郎吉は、「欠歯の徒甚繁也。米利堅より厳に禁ずれども尚止まず」[池田1968: 265]と、エリス師とはおよそ反対の状況を語っているのである。事実はどうであったのか。次郎吉の陳述に真実があるような印象をうけるが、少なくとも、エリス師の記述を無批判にはうけいられないことを、われわれは知るのである。

漂流民の記録には、上に述べたような民族誌的価値のほかにも、つぎのような人類学的な資料価値もある。それは世界についての地理的知識も、異民族・異文化についての知識もまるで持ちあわせぬ日本人、しかも知識階級ではない庶民が、はじめて接した異民族・異文化にどのように反応したかという、カルチュア・ショックの問題への資料提供という意味においてである。たとえば、結論的には常識的なことであるが、漂流民のうちで一般に高齢者ほどカルチュア・ショックが大きく、異文化への適応が遅いものに対して、ジョン・万次郎やアメリカ彦蔵のような十代の若者の適応がすばやいことなどを、漂流の記録は期せずして描きだしているのである。これはほんの一例で、カルチュア・ショックの観点からの興味ある事実が、そこにはいろいろと提供されている。とにかく、江戸時代庶民が、なんの予備知識もなしにはじめて接触し、そのなかに身を置くこととなった異文化を、どのように眺め、感じ、考え、理解したか、すこぶる興味深いものがある。

漂流の記録の人類学的価値は、けっしてこれだけに尽きているわけではないが、ここで私が言いたかったことは、要するに、従来あまり注目されなかった資料で、なお価値の高いものがあるという事実である。

以下、本稿では、これまで私が主たる研究のフィールドとしてきた太平洋諸島にかかわる漂流の記録の史料目録を、若干の解題を付して掲げる。さきにも述べたように、史料はすべて誰でもが披見しうる公刊本にかぎり、未刊のものも挙げていない。したがって、これで網羅し尽しているというわけではないが、公刊史料にかぎっていえば、それほど遺漏はないものと思う。しかし、なお目の届きかねているものもあるし、まったく見落としている史料もなしとしない。ご教示、ご指摘をいただければ幸いである。記事内容の検討は後日に譲り、今回は目録の提示だけである。

Ⅳ. オセアニア関係漂流史料

以下には、年代順、漂流船別に史料を掲げる。

1. 若宮丸関係

(1) 船籍等

奥州石巻，米沢屋平之丞持船，800石積，24端帆，16人乗組。

(2) 遭難・漂流

寛政5年（1793）12月2日。

(3) 帰国

文化元年（1804）9月6日（4名）。

(4) 太平洋での停泊または滞在地

ヌクヒヴァ島（マルケサス諸島）およびハワイ島（ハワイ諸島）。

(5) 経緯

寛政5年11月27日，木材・米などを江戸へ回漕するため石巻を出港，塩屋崎の沖のあたりで暴風に襲われて漂流におちいる。翌寛政6年5月10日，アリューシャン列島に漂着，島民に救助されたのちロシア人に引渡され，シベリア，ヨーロッパロシアを横断してペテルブルクに送られる。ペテルブルク到着は享和3年（1803）4月26，7日頃。この間3人病死，3人病氣残留，残るは10名。このうち，さらに6人がロシア残留を希望し，爾余の津太夫ら4名だけが，ロシアの遣日使節レザノフの乗艦ナデジュダ号に便乗して，クロンシュタット港から日本へ向けて帰国の途につく。享和3年6月16日のことであった。

艦はデンマーク，イギリス，カナリア諸島をへて大西洋を横断，ケープ・ホーンを回って太平洋にでる。太平洋を北西に進み，カムチャッカをへて文化元年（1804）9月6日長崎入港。津太夫らは10年余の歳月をかけて，はからずも日本人として初めて世界一周をはたしたことになる。太平洋横断の途中では，文化元年4月下旬に13日間ほどマルケサス諸島のヌクヒヴァ島に，その後5月中に数日間をハワイ諸島の主島ハワイ島に，それぞれ停泊している。これは記録に残るかぎりでは，日本人がポリネシアを見た最初である。

(6) 史料

上述のような経緯から，若宮丸関係の史料では，当然のことながらロシアに関する記述が量的にもっとも多く，かつ詳しくもある。しかし，マルケサスやハワイについ

でも触れるところがないわけではない。とくにマルケサスについては、やゝ詳しい記述をみることができる。史料には以下のものがある。

『通航一覽』卷之三百十八（魯西亞国部四十六） 嘉永6年（1853）（国書刊行会刊本 第8巻 大正2年刊）

これには長崎奉行所での津太夫らの「口書」2種が収められている。そのうちの一つは、漂流から帰国までの経過を、途中見聞した情景描写をまじえながら述べたもの。他は、訪れた土地土地の風土・風俗を、土地別にまとめて述べたもの。この2種類の「口書」は、荒川秀俊（編）『日本漂流漂着史料』（気象研究所 昭和37年刊）にもそのまま転載されている。

また、2種の「口書」のうちの前者とほぼ同じものが、「異国江漂流仕候陸奥国の者四人口書」と題して、荒川秀俊（編）『異国漂流記集』（気象研究所 昭和37年刊）に収録されているが、荒川氏によれば、これは宝珍文庫旧蔵の写本によったものという。

『環海異聞』大槻玄澤、志村弘強（編） 文化4年（1807）

津太夫らは1年余を長崎に留め置かれたのち、仙台藩の江戸藩邸にひきとられた。ここで蘭学者大槻玄澤と志村弘強から40余日にわたって聞取りをうける。その記録に校訂をほどこし、1年半をついやしてまとめたものが本書であり、仙台藩主伊達周宗に献上された。全15巻より成るうち、第13巻にマルケサスおよびハワイに関する記述がある。

本書の写本は数多くあるものようであるが、明治以降の刊本にはつぎの各種がある。

石井研堂（編）『校訂漂流奇談全集』（博文館 明治33年刊）の第22篇

これは大槻家所蔵本を底本にしたというが、原本にある多数の挿図を欠いている。

大友喜作（編）『北門叢書』第4冊（北光書房 昭和19年刊）

前記石井本を底本とし、大友氏所蔵本と中村徳重郎所蔵本および帝国図書館本を参照したという。中村本から挿図が転写されている。ただし無彩色（原本の挿図は着色）。編者大友氏の優れた解説が付されている。

宮崎栄一（編）『環海異聞』（叢文社 昭和51年刊）

石井本を底本とし、宮崎氏所蔵本から彩色挿図を口絵に転写している。

杉村つとむ（編）『環海異聞——本文と研究』（八坂書房 昭和62年刊）

国立公文書館、内閣文庫所蔵本を底本とし、早稲田大学所蔵の大槻本を参照。挿図は無着色であるが、別に着色口絵として京都大学教養部図書館所蔵本のを転載し

ている。編者による詳細な解説と研究が付されている。

『環海異聞』の刊本には、上記のほかに三島才二（編）『南蛮紀文選』（洛東書院大正14年刊）の第4篇

三島才二（編）『南海稀聞帳』（潮文閣 昭和4年刊）の第1篇があるが、遺憾ながら筆者（石川）は未披見である。

若宮丸関係の史料には、上記の「口書」類と『環海異聞』以外にも、幾つかの別種の「漂流記」がある。いずれも未公開の写本なので、ここには省略する⁴⁾。

2. 稲若丸関係

(1) 船籍等

大坂安治川，伝法屋吉右衛門持船，500石積，17端帆，8人乗組。

(2) 遭難・漂流

文化3年（1806）正月7日。

(3) 帰国

文化4年（1807）6月18日（ただし，一説には6月11日）（2名）。

(4) 太平洋での停泊または滞在地

オアフ島（ハワイ諸島）。

(5) 経緯

江戸へ荷物を回漕し，その帰途遠州灘で遭難，70余日漂流を続けるうち，文化3年3月20日アメリカ船に救助される。この船は4月28日オアフ島に寄港，漂流日本人一同を島の役所に託す。約4カ月間をオアフに過ごしたのち，8月中旬一同8名はアメリカ船に送られて帰国の途につく。もちろん，当時のアメリカは日本と国交がないから，直接日本に送還することはできない。日本と通交のある清国に託すため，マカオをへて10月6日広東着。しかし，広東側は日本人の受取りを拒否。やむなく再びマカオに連れ戻され，ここで便船を待つこととなるが，けっきょくオランダ船の便を求めて清国船でジャカルタへ送られる。12月25日マカオ出帆，文化4年正月21日ジャカル

4) 若宮丸の漂流事件は，その漂流民がはからずも世界を一周した最初の日本人になったということもあって，これまでもさまざまな書物に紹介されてきた。それらのなかでは，春名氏のもの[春名 1981: 115-166]がもっともすぐれている。春名氏は未公開の写本も史料とする一方，日露外交関係の文献や，漂流民を送り届けたナデジュダ号の艦長クルーゼンシュテルンの紀行を参照するなどして，たんなる紹介という以上の仕事をされている。一般向きにわかりやすく叙述されているが，実質は学術論文と称してよい。ただし，紹介の中心は漂流民のロシア体験にあり，マルケサスやハワイでの漂流民の見聞には，まったく触れていない。私もかつて，若宮丸事件に多少触れたことがあり，そのおりに，おもにマルケサスとハワイでの漂流民の見聞を紹介した[石川 1984: 198-203]。

到着。ジャカルタで3カ月近くを過ごす間、2人病死。残り6人は長崎へ向かうオランダ船に送られて、4月15日ジャカルタを出帆するも、船中でさらに4人病死、善松、松次郎の両人のみが生還した。ただし、松次郎は長崎奉行所での吟味中、強度のノイローゼが高じて縊死、善松ただ一人故郷の芸州へ帰ることができた。

(6) 史料

『芸州善松北米漂流譚』（石井研堂編『異国漂流奇譚集』福永書店 昭和2年刊に収録）

編者石井研堂によれば、これは大槻氏文庫稿本続海外異聞中の異国漂流記によるものとのことで、文化4年長崎奉行所での「口書」である。

ハワイに関する叙述は、前記のように善松は約4カ月間をそこに滞在し、その実際の見聞をもととしているので、かなり正確に当時の状況を写しているものとみてさしつかえないようである。ただし、記述量はそれほど多くない。なお、善松が滞在した文化3年は、ハワイ王国の創建者カメハメハ大王が王朝をひらいて12年目にあたる。

『通航一覧』巻之二百五十一および三百二十二（前出刊本 第6巻および第8巻 大正2年刊）には、オランダ船が漂流日本人（善松のこと、ただし名前の記載は無い）を送り届けてきた事実の記載があるだけで、「口書」類など善松の体験談はまったく収められていない。

3. 神社丸関係

(1) 船籍等

奥州南部領閉伊郡船越浦、黒沢屋六之助持船、650石積（一説には800石積）、12端帆、12人乗組。船名について後出「戸川家蔵長崎志統編」では神祐丸としているが、他の史料ではすべて神社丸であり、神祐丸は誤写と思われる。

(2) 遭難・漂流

文政3年（1820）12月12日（一説には12月6日）。

(3) 帰国

文政8年（1825）12月13日（4名）および文政9年（1826）正月元日（3名）。

(4) 太平洋での停泊または滞在地

パラオ諸島。

(5) 経緯

鰯粕・大豆・魚油・鰹節などを積んで、文政3年11月26日南部領大槌浦（または大辻浦）を出帆、江戸へ向かう途中房州沖で暴風雨に遭い、漂流すること38日、翌文政

4年(1821)正月21日(一説には20日)パラオに漂着。このおり、上陸に際して2名溺死。残余の者は島民に助けられて、ここでおよそ4年の歳月を過ごすこととなるが、この間に2人が病死、残りは8人となる。

文政6年(1823)7、8月頃外国船1隻来航、ナマコを集荷するため約1年間停泊。漂流民8人はこの船に便乗して文政7年(1824)8月3日パラオを脱出、10月1日シヤムに渡る。そのあと、清国船で澳門に送られ、ここから各地を転々としてのち、文政8年(1825)10月15日浙江省の乍浦に着く。これまでにまた1人病没、残り7人となる。

当時の乍浦は対日交易の一拠点だったところで、ここから2隻の交易船に分乗し11月24日出帆。洋上難風に遭い、一隻(4名便乗)は12月13日大隅国屋久島に漂着、他の一隻(3名便乗)は翌文政9年(1826)元旦に遠州下吉田村に漂着した。当初の12名中、7名が生還したわけであるが、さらに1名が長崎奉行所内の揚屋で病死したため、結局故郷に帰国できたのは6名であった。

(6) 史料

『通航一覧統輯』巻之七十八(諸厄利亜国部十五) 安政3年(1856)(清文堂刊本 第3巻 昭和45年刊)

これには神社丸関係の資料4点が収録されている。

「戸川家蔵長崎志統編」

「唐船漂泊一件」

「視聞草」

「甲子夜話統編」

以上4点である。このうち「唐船漂泊一件」は、清国からの漂民護送状および駿府代官並びに遠州中泉代官あての漂民の「口書」。「長崎志統編」は「口書」その他をもとに編集されたもの。ともに漂流から帰国までの顛末を述べており、パラオについての見聞が中心となっているが、「長崎志統編」のほうがやや詳しい。「視聞草」は駿府代官羽倉外記の書状の一部で、ごく短いものであり、パラオについて触れるところは無い。最後の「甲子夜話統編」は、つぎに述べる『ペラホ物語』の転載である。

なお、この『通航一覧統輯』巻之七十八の記事は、荒川秀俊(編)『異国漂流記続集』(気象研究所 昭和39年刊)にもそのまま収録されている。

『ペラホ物語』西田直養(記) 天保6年(1835)(松浦静山『甲子夜話三篇』巻之六十八 平凡社刊本 東洋文庫 427『甲子夜話三篇』第6巻 昭和58年刊 に収録)

西田直養は小倉の人。神社丸の漂流民の一人庄吉(おそらくは「口書」に言う長

吉)が、引取りの南部藩士に伴われて長崎から南部領に帰る途中、豊前小倉を通過したさい、文政9年(1826)9月3日に本陣大坂屋良助方で直養が庄吉と交わした問答を、天保6年(1835)に『ペラホ物語』の表題でまとめたもの。その内容の珍奇さに感銘して、静山が自著に再録したわけである。

内容構成は、まず漂流から帰国までの経緯を略記したのち、パラオの気候、地形、動・植物から住民、衣・食・住、さらに社会組織、慣習に至るまでを、一問一答形式で記述している。さきに述べたように、この『ペラホ物語』は『通航一覽統輯』巻之七十八にも収められているが、ただし、これにあつては、『甲子夜話三篇』収録のものにある「男女の姿」、「男女交接事」、ほか性に関する記事がいっさい省略されている。

前出の石井(編)『校訂漂流奇談全集』の第30篇も『ペラホ物語』の再録である。

『パラウ漂流記』(『南部叢書』第10冊 南部叢書刊行会 昭和6年刊 に収録)

これは前出『通航一覽統輯』巻之七十八に収載の「唐船漂泊一件」とほとんど同じ「口書」である。多少の違いは転写の際の誤写、あるいは故意の修辞によるものと考えられる。たとえば、『パラウ漂流記』は、漂流民がシャムからまず送られた先を廈門としているが、これは澳門の誤写と思われる。「長崎志統編」、「唐船漂泊一件」のどちらもが澳門としているだけでなく、『ペラホ物語』には片仮名でオホモンと記されているからである。いうまでもないことであるが、澳門はマカオ、廈門はアモイのことである。

なお、『パラウ漂流記』は、前出の荒川(編)『日本漂流漂着史料』にも再録されている⁵⁾。

4. 長者丸関係

(1) 船籍等

越中富山、能登屋兵右衛門持船、650石積、21端帆、10人乗組。

(2) 遭難・漂流

天保9年(1838)11月23日。

(3) 帰国

天保14年(1843)5月23日(6名)。

(4) 太平洋での停泊または滞在地

ハワイ島・マウイ島・ラナイ島・オアフ島(以上ハワイ諸島)。

5) 神社丸漂流一件については、帝塚山大学の高山純教授に研究論文がある[高山 1985]。内・外の文献を渉猟して考証を試みた労作である。

(5) 経緯

天保9年11月23日、仙台領唐丹湊を出帆後ほどなく暴風に吹流される。漂流中2名病死、1名投身自殺。翌年(1839)4月24日アメリカ捕鯨船に救助され、9月上旬ハワイ諸島へ。以後天保11年(1840)7月下旬にイギリス船でホノルルを出帆するまで、およそ11カ月間をハワイ諸島に滞在。この間、ハワイ島・マウイ島・ラナイ島・オアフ島に足跡をしるしている。オアフ島で1名病没、残り6名はイギリス船でカムチャッカに運ばれ、約2年間を過ごしたのち、さらにアラスカのシトカに移され、ここにも4カ月間滞在。天保14年3月下旬にようやくロシア船で日本に送られることとなり、同年5月23日エトロフ島フルベツ沖で日本側役人に引渡される。その後6名の漂流民は松前をへて江戸に送られ吟味をうける。いったん帰郷を許されるも、再度江戸に呼び返され、最終的に放免帰郷がかなったのは嘉永元年(1848)10月1日のことであった。ただし、江戸滞在中に2名病死しているので、無事帰郷できたものは、当初10名中4名だけであった。

(6) 史料

『時規物語』 遠藤高環他(編) 嘉永3年(1850) (刊本としては 池田 皓編『日本庶民生活史料集成』第5巻<『漂流』> 三一書房 昭和43年刊 に収録)

刊本の編者池田皓氏によれば、原本は前田家尊経閣文庫に所蔵されており、写本としては、図録その他を省略したものが1種類だけ宮内庁書陵部にあるほか皆無のよし。池田氏の刊本は、尊経閣文庫の原本を底本としている。原本にある200余枚の図録は、池田氏の刊本にも再録されているが、ただし、前者が彩色画であるのに対して、後者は無着色である。

原本の編者の一人遠藤高環は、加賀藩の高名な暦学者で、天文・地理・数学に詳しく、当時は算用場奉行を勤めていた。家郷に生還できた4名の漂流民は、もともと富山藩領のものであったが、富山藩は加賀藩の支藩であるため、加賀前田家の藩士が、藩侯の命を受けて漂流民の事情聴取にあたったわけである。たんなる聞き書きではなく、精密な校訂をほどこして編纂されたものであることは、前述大槻玄澤の『環海異聞』のばあいと同様である。1年3カ月をついやして完成した原本は、藩主前田齊泰に献上された。

全10巻および附録から成るうち、第2巻がもっぱらハワイ諸島の記述にあてられている。漂流民が滞在した当時のハワイは、カメハメハ3世の治世で、ハワイ王国が近代国家としての体裁をしだいに整えつつある時代であった。また、太平洋捕鯨の最盛期でもあった。1年近くを現地に滞在していた長者丸漂流民の見聞は、当時のハワイ

事情を知るうえで、貴重な史料とすることができる。

『蕃談』 憂天生（編） 嘉永2年（1849）（刊本は上掲の池田〈編〉本と同じ。別に現代語訳本として、室賀信夫・矢守一彦〈編訳〉『蕃談』 平凡社 東洋文庫39 昭和40年刊）

編者憂天生は古賀増^{まさる}（通称謹一郎）の匿名。幕府の儒官であり、同時に蘭学愛好家でもあった。よく知られているように、嘉永6年（1853）にロシヤ使節プチャーチンが長崎に来航したおりには、勘定奉行勝手掛川路聖謨らとともにその接衝にあたった。のち、安政4年（1857）の蕃書調所の開設時から文久2年（1862）まで、その頭取をつとめた。

『蕃談』成立の経緯については、刊本編者池田氏の「解題」と、現代語訳本の編訳者室賀教授の「解説」に詳しい。同じ漂流をアツクアツク『時規物語』が、漂流4人からの聴取をもとに、遠藤高環らが校訂をほどこして編纂し、藩侯に献上した官撰本であるのに対して、『蕃談』は、漂流民らの江戸滞在中にその一次郎吉について、古賀謹一郎が聴取してまとめた私撰本である。

本書はあまり流布されなかったというが、それでもかなりの写本があるようである。池田氏の刊本は、東洋文庫所蔵の写本を底本としている。室賀教授らの編訳本は、京都大学付属図書館所蔵の写本を底本とし、東洋文庫所蔵本をもって前者の欠をおぎなったという。ただし、東洋文庫所蔵本のさし絵が彩色画であるのに対して、室賀本も池田本も、ともにさし絵は無彩色である。また、室賀本に収められたさし絵の点数は、池田氏のそれに比してかなり少ない。

『蕃談』全3巻の構成は、漂流から帰国までを年月の経過にそって述べるという形をとらず、また、ハワイ、カムチャッカ、アラスカなど、遍歴地ごとにまとめるという形でもなく、まず第1巻に経過の概略を述べたのち、第2、第3巻は、見聞したところを「天地」「人物」「習俗」「政教」等々の項目別に分類・整理して叙述するという形式を踏んでいる。したがって、ハワイに関する記事は全巻随所にてでくるわけである。『時規物語』のハワイ記事と内容的に重なる事実も多いが、いずれにせよかなり詳細である⁶⁾。

5. 中吉丸関係

(1) 船籍等

奥州仙台領気仙沼小友浦、及川庄兵衛持船、積石数・帆端数不詳、6人乗組。

6) 清野謙次博士が、人類学者としてはじめて『蕃談』に言及している[清野 1942]。また、富山大学の高瀬重雄教授にも研究論文がある[高瀬 1957]。

(2) 遭難・漂流

天保10年(1839)11月25日。

(3) 帰国

天保11年(1840)3月24日(6人)。

(4) 太平洋での停泊または滞在地

父島(小笠原諸島)。

(5) 経緯

鯨節・昆布など海産物を常州那珂湊江戸屋文次郎方へ送るため、天保10年11月15日小友浦を出帆。25日常州鹿島沖で難風に遇い漂流、12月28日一島を発見、翌29日上陸するも、ここは無人島でかつ水も無いため、再び船にもどって東航、翌天保11年正月4日別の島(父島)を発見して上陸する。ここには人家12、3軒、男女あわせて30人ばかりが居住。同島に60日ほど滞在ののち、南風をえて3月7日同島出帆、同月24日下総銚子湊に帰帆。

(6) 史料

『通航一覧統輯』巻之百五十(異国部四) 安政3年(1856)(既出刊本 第4巻 昭和47年刊)

これには、銚子湊諸役人の糺問による「口書」(天保11年4月付)ならびに、漂流民6人が滞在した島の模様を聞き取った「天保十年奥民漂流記」とが収められている。後者には挿図7葉が付されている。この『通航一覧統輯』の記事は、荒川(編)『異国漂流記統集』にも転載されている。

『小友船漂流記』(前出『南部叢書』第10冊 および、同じく前出の『日本漂流漂着史料』に収録)

漂流の経緯と島事情についての聞き書き、および、天保11年12月29日付の奉行所の裁決に対する「御受証文」が収められている。島の事情についての叙述は、この書がもっとも詳しい。『通航一覧統輯』には島名がまったく記されていないが、本書では漂流民が滞在した島の名を「アナイ」、さきに上陸した無人島を「ホウロキボウホウ」としている。しかし、これらの地名からその島がどこであるのかを特定することは困難である。記事内容から判断せざるをえないが、書中にえがかれた島の状況から推して、「アナイ」島が小笠原諸島の父島であることは確実である。

地名のことをいま少し続けると、よく知られているように、小笠原諸島がその存在を明確に認識されるようになったのは、1827年(文政10年)イギリス軍艦プロッサム号がここを訪れてからのことである。このおり、艦長ピーチーは、こんにちの父島を「ピー

ル島」(Peel Island)と名づけたほか、他の島々にも命名している【CHOLMONDELEY 1915: 11】のであるが、それらのビーチーの命名のなかには、「アナイ」や「ホウロキボウホウ」を思わせるものはまったく見あたらない。ハワイからの入植はその3年後のことであるが、彼ら入植者がビーチーの命名とは別に、自分たちで島名をつけていたのであろうか。しかし、それを伝える史料はまったく存在しない。

ハワイ在住の欧米人5人が、ハワイ島民男女あわせて15人をともなって、父島に入植したのが1830年(天保元年)、ビーチーの来航より3年後のことである。これが小笠原の最初の定住者となったのであった。中吉丸の漂着は、ちょうどその10年後にあたり、入植者たちがまだかなり「原始的」な生活を送っているようすや、彼らの言葉が英語とポリネシア語(ハワイ語)とを混じえていることなどが知られて、すこぶる興味深い。小笠原植民初期の生活史料として貴重である。

6. 土佐国漁船関係

(1) 船籍等

土佐国高岡郡(吾川郡とした史料もある)宇佐浦、筆之丞事伝蔵持船(居浦の徳右衛門の漁船を借受けたともいう)、かわら(和船の船底材)2丈5尺、5人乗組。

(2) 遭難・漂流

天保12年(1841)正月7日。

(3) 帰国

嘉永4年(1851)正月3日(3名)。

(4) 太平洋での停泊または滞在地

オアフ島(ハワイ諸島)、グアム島、ギルバート諸島、バタン島、サモア諸島、ニューギニア(ギルバート諸島以下は漂流の一人、万次郎のみ)。

(5) 経緯

有名なジョン・万次郎を含む土佐漁民の漂流事件である。

天保12年正月5日宇佐浦を出漁、7日西寺鼻の沖で難風に遭い漂流、同月13日一人島(鳥島)に漂着。およそ5カ月間の孤島生活ののち、6月4日ごろアメリカの捕鯨船に拾われる。11月下旬オアフ島ホノルルにともなわれ、万次郎をのぞく4人はここに滞在することとなる。万次郎のみそのまま捕鯨船に水夫見習として残留。万次郎14才のときのことであった。

オアフ島にとどまった4人のうち、1名病死、2名は帰国せんとして弘化3年(1846)10月下旬別のアメリカ捕鯨船に便乗、グアム島に2カ月間ほど停泊滞在ののち、八丈

島をへて北海道にいったんは上陸するも人影なく、ふたたび船にもどって弘化4年(1847)10月はじめホノルルに帰帆。以後嘉永3年(1850)10月末までオアフ島に滞在。

いっぽう、万次郎の乗った捕鯨船は、鯨を追いつつギルバート諸島、グアム島、バタン島、サモア諸島などをへて南米南端を迂回し、天保14年(1843)4月ごろマサチューセッツ州のフェアヘーヴンに着く。周知のように、当時のフェアヘーヴンは、ニューベッドフォード、ナンタケットとならぶアメリカの三大捕鯨基地(母港)の一つであり、万次郎乗船の捕鯨船はフェアヘーヴンを母港としていたのである。万次郎はここで船長の庇護のもとに学校教育をうけ、また測量術や航海術も習得する。弘化3年(1846)6月再度出漁。喜望峰、インド洋をへて太平洋にはいり、弘化4年(1847)10月はじめホノルル着帆。この間、チモール島のクーパン、ニューギニア、グアム島、琉球などに立寄りつつ捕鯨操業。ホノルルでは残留の仲間3人と再会するが、あわただしく出帆、グアム島、マニラ、セラム島などで薪水補給をしながら捕鯨を続けたのち、喜望峰回りで嘉永2年(1849)9月フェアヘーヴン帰着。そのあとすぐ、万次郎は帰国の旅費稼ぎにカリフォルニアの金山掘りにでかけ、そこそこ稼いで嘉永3年(1850)10月便船をえてサンフランシスコ出帆、同月末ホノルルに着く。残留の仲間3人と合流、帰国を計るが、1人寅右衛門は帰国に应ぜず最終的にハワイ残留。万次郎、伝蔵(本名筆之丞)、五右衛門の3名のみ清国へ向かうアメリカの貿易船に便乗して帰国の途につく。嘉永4年(1851)正月2日、琉球沖3里ほどのところがかねて用意のボートをおろし、これに移乗して本船に別れる。3日朝摩文仁間切に上陸。薩摩藩役人に引取られ、山川、鹿児島をへて同年9月29日長崎奉行所に引渡される。奉行所の吟味を終えて、生国土佐に帰郷できたのは嘉永5年(1852年)7月11日、宇佐浦出漁からじつに11年半ぶりのことであった。

(6) 史料

『通航一覽統輯』卷之七十九(諸厄利亞国之物十六) 安政3年(1856)(既出刊本 第3巻 昭和45年刊)

「異国漂流記」

「辛丑異国漂流記」

「中浜万次郎漂流記」

の3種が載録されている。このうち「異国漂流記」は、嘉永4年11月の日付をもつ長崎奉行所での「口書」をもととしたものであるが、一部記述に混乱があり、万次郎の第2回捕鯨行の記事が第1回のそれにまぎれ込んでいたりする。筆写の際の誤りであろう。オアフ島についてはほとんど叙するところがないが、ギルバート諸島、グアム

島、バタン島、サモア諸島のそれぞれの情況について、多少触れるところがある。

「辛丑異国漂流記」は土佐藩の藤崎鮮明が嘉永5年に万次郎から聞き取ったもの。漂泊の経過については重きを置かず、オアフ島風俗を記述の中心に据えている。ただし、万次郎自身のハワイ生活があまり長くないので、記述も詳しくはない。

「中浜万次郎漂流記」は、万次郎ら3名を長崎奉行所へ送ったむねの松平（島津）薩摩守の届書（嘉永4年9月11日付および11月18日付、幕府あて）と、長崎奉行から土佐藩家臣への連絡状（嘉永4年11月7日付）および漂人受取方要請状（嘉永5年4月付）とを収めたもの。まったくの事務連絡文書で、島々についての記述はない。

『通航一覽統輯』卷之八十（諸厄利亜国部十七） 安政3年（1856）（同前）

上掲「異国漂流記」の続きと思われるものが収録されている。これには冒頭に「嘉永四辛亥年十一月無人島并外国の様子漂流人申口」とあるように、島別もしくは地域別に気候・風俗等が叙述されている。太平洋関係では「オアホ之様子」「キンアンメルフル島之様子」「キアン島の様子」「エミヨウ島の様子」「ハタン島之様子」の各項目があり、太平洋をややはずれるが、「タイモル島之様子」「呂宋島之様子」「シイラム島之様子」などもある。オアホはもちろんオアフ島であり、キンアンメルフルはキングスミル・グループの訛りで、現在の呼名ではギルバート諸島、キアン島はグアム島、エミヨウ島はこれだけでは判別しがたいが、後出の『漂客談奇』にこの島の所在を「ナバケイトーの内」としているの、ナヴィゲーター諸島つまりサモア諸島中の一島と判断される。タイモル島はチモール島、シイラム島はセラム島のことである。

それぞれに簡潔に見聞談が叙されているが、オアフ島については、万次郎をのぞく他の2人の滞在が数年におよぶため、かなり詳しい。当時のハワイは、カメハメハ3世王の治世である。しかし、ハワイについて以上に貴重な記述は、グアム島その他太平洋諸島についてのものである。述べるところ僅かとはいえ、ハワイ以外の太平洋の島々についての明治以前日本人の直接見聞は、はなはだ少ないからである。

『通航一覽統輯』卷之百十五（北亞墨利加部十二） 安政3年（1856）（既出刊本第4巻 昭和47年刊）

「某秘記」として、「嘉永六癸丑年十月御勘定奉行札問書」が収められている。その内容は、ほとんどすべてアメリカ合衆国（共和政治州という名称をあてている）の国情説明に終始して、ハワイをはじめ太平洋諸島について記述するところはない。ただ、捕鯨行のさいに上陸または数日滞船した場所を列挙しているなかに、台湾が挙げられている点が注目される。他書で台湾に触れているものはない。

『漂客談奇』吉田文次正誉（編） 嘉永5年（1852）（刊本としては既出池田編『日

本庶民生活史料集成』第5巻 および同じく既出の荒川編『異国漂流記集』に収録)

編者吉田正誉は高知の学者。万次郎ら3名の漂流民が高知にもどつてのち、嘉永5年の初冬の1日、吉田が直接面談して聞き取ったものである。刊本の荒川本は何を底本としたか明らかでないが、池田本と同系統本であり、その池田本は国会図書館所蔵の6写本のうち、比較的善本を選んで底本とし、前田家尊経閣文庫本を参考にしたよし。石井研堂(編)の前出『校訂漂流奇談全集』にも同名書が収録されているが、これは「口書」であつて内容は別物である。

さて、『漂客談奇』全篇は3談から構成されている。第1談は漂流から帰国までの経過を述べており、談中ギルバート諸島、グアム島、サモア諸島、チモール島、ニューギニア、マニラに触れた箇所では、それぞれ簡単なながらも土地柄や住民のようすなどを述べている。第2談では、ハワイとアメリカとに分けて、それぞれの国情・風俗などが語られる。第3談は第2談の補足である。最後に編者吉田は、まだ聞きたいことはあるけれども、漂流民11年間の談話をわずか1日で聞いたことであるから、疎略がはなはだしく、そのうえ、自分は海外事情に不案内なので、ただ漂流民の語るまゝを記しただけである、と「あとがき」をしるしている。巻末には十数葉の図と、日本語・英語・ハワイ語3者の対照表が付されている。

『漂流奇談』土州高智隠士(編) 嘉永5年(1815)(刊本は上掲荒川編書に同じく収録)

荒川本は伊達家旧蔵の写本を底本としたよしであるが、これは上に挙げた『漂客談奇』の同系統本であり、ただし、それよりもやゝ詳しい。『漂客談奇』には、『漂流奇談』からの誤写と思われる箇所もあり、『漂流奇談』のほうが原本に近いと考えられる。しかし、荒川本によるかぎり、『漂流奇談』には付図ならびに日・英・ハワイ語の対照表が欠落している。なお、これにあつては編者名が高智隠士と匿名で示されているが、『漂客談奇』の同系統本である以上、吉田正誉であることはいうまでもあるまい。高智はもちろん高知のことである。

『漂民録』 下村英恕(編)(刊本は既出荒川編『日本漂流漂着史料』に収録)

荒川氏は底本を明らかにしておられない。編者下村英恕の人物も不明。これには、さきに挙げた『通航一覽統輯』卷之七十九所載「中浜万次郎漂流記」に収められている、松平薩摩守の長崎奉行所宛届書と同じものが載せられているほか、同書にある長崎奉行から土佐藩家臣への連絡状に対する回答と思われる文書、漂流民受取りの土佐藩士への長崎奉行からの達状、それと漂流民からの「漂流始末聞書」が収録されている。しかし、それらのどれにも、太平洋の島々についての記述はみられない。

『漂流万次郎帰朝談』（刊本は既出石井編『異国漂流奇譚集』所載）

底本不明。「口書」の一種であるが、漂泊の経過を克明にたどるというよりは、ハワイ、アメリカ等の国情・民俗の記述に大半をついやしている。他の万次郎関係史料にはみられぬ事実の記載もある。

『漂流記』鈍通子（編）滄浪軒版行 嘉永6年（1853）（刊本は荒川秀俊編『近世漂流記集』法政大学出版局 昭和44年刊 に収載）

江戸時代に版行された数少ない「漂流記」の一つである。編者鈍通子は仮名垣魯文の別号。さすが戯作者魯文の筆になるだけに、「往昔、何れの御時にや有けん……」と書きだし、「めでたしめでたし」で閉じるという具合に、物語ふうの叙述の仕方である。しかし、内容に脚色があるとは思えず、ハワイ、アメリカ事情がやや詳しくえがかれている。ニューギニアやギルバート諸島と思われる土地の風俗についても触れている⁷⁾。

7. 榮寿丸（永住丸）関係

(1) 船籍等

兵庫西宮，中村屋猪兵衛（伊兵衛としたものもある）持船，1000石積（一説に1200石積），28端帆，13人乗組。なお，船名については，榮寿丸としたものと永住丸としたものがある。

(2) 遭難・漂流

天保12年（1841）10月12日。

(3) 帰国

天保14年（1843）12月3日（2名），弘化2年（1845）7月11日（2名），同年同月13日（1名）。

(4) 太平洋での停泊または滞在地

ハワイ諸島。

(5) 経緯

兵庫より奥州南部へ向けての航海途上，犬吠岬沖で暴風に襲われて漂流。天保13年（1842）2月8日頃スペイン船に救われ，3月20日カリフォルニア半島のサンルカス

7) ジョン・万次郎は，井伏鱒二氏の直木賞受賞作「ジョン万次郎漂流記」（昭和12年）のおかげもあってか，日本の漂流民のなかでは，大黒屋幸太夫，浜田彦蔵（ジョセフ・ヒコ）とならんで，もっとも知名度の高い一人であろう。帰国後，幕臣に取立てられ，幕末外交史上に活躍したことも，その知名度を高めるうえにあずかっていたかもしれない。そのため，彼については数種類の評伝が書かれている。この稿を書くにあたって，私もその幾つか [ワリナー 1966；中浜 1970；成田 1976；坂本 1988] を参照した。

に運ばれる。ただし6名はそのまま船に連去られ、置去りにされた7名だけが上陸。この7名は土地の者に助けられ、サンホセに送られる。奇しくもここで、さきに船で連れ去られた6名中の2名に再会、一行9名となる。のちには、さらに1名と合流してつごう10名となる。于余曲折をへて、この10名のうち紀州生まれの善助と阿波出身の初太郎の両名が、メキシコのマサトランから便船をえてマカオに渡り、舟山、寧波、乍浦をへて天保14年12月3日長崎に帰国。肥前島原生れ太吉、伊予松山の伊之助、能登の儀三郎の3名は、善助らとは別便でマニラへ送られ、そこからマカオ、舟山、寧波、杭州、乍浦をへて、弘化2年7月11日長崎着、ただし儀三郎だけはマカオに留って帰国せず。紀州出身弥市は、これまた別船でマカオに送られ、香港、舟山、寧波、杭州、乍浦をへて長崎に帰着したのは弘化2年7月13日であった。他の7名のその後の消息は不明。おそらくメキシコに残留したままとされる。

(6) 史料

この漂流一件については、嘉永7年(1854)に版行された『海外異聞、一名亜墨利加新話』(既出荒川編『異国漂流記続集』に収載)のほか、その原本である『亜墨新話』——これは阿波出身初太郎からの聞き書きを、阿波藩の儒臣前川文、那波希顔がまとめて藩主蜂須賀斉裕に献呈したもの(既出石井編『校訂漂流奇談全集』、『通航一覽続輯』巻之百十四<刊本第4巻>などに収録)——や、その他「口書」類が幾つか残されている。しかし、それらはどれも、漂流民が長期滞在した19世紀中頃のメキシコ事情と、帰国前に訪れた中国諸港市の事情についてはかなり詳しく、これはその方面での貴重な史料とみなすことができるが、漂流民らが帰路太平洋横断中にハワイに寄港したと思われるにもかかわらず、これに触れるところはまったくないのである。唯一、ハワイについてわずかながらも触れているのは、つぎの史料だけである。

『東航紀聞』岩崎俊章(編) 嘉永4年(1851)(刊本は池田編『日本庶民生活史料集成』第5巻 に収載)

国会図書館所蔵本が底本とされている。刊本の編者池田氏によれば、同書の所在は国会図書館以外に知られぬよし。

稿本の編者岩崎俊章は紀州和歌山藩士。藩侯の命により、紀州出身の漂流民で帰国できた善助および弥市の両名について聞き書きを作り、これを仔細に校訂して全10巻にまとめあげたものが本書である。編纂にあたっては、桂川甫周(編)『北槎聞略』と、大槻玄澤(編)『環海異聞』とを手本としたことが、編者岩崎によってその序文中に記されている。

全10巻は「漂流始末」3巻、「風土記事」6巻、「附録」1巻(唐山紀事)から成る

が、残念ながら現存するのは「漂流始末」3巻と「風土記事」3巻だけで、他の4巻は所在が知れない。ハワイに関する記述がみられるのは、第2巻（「漂流始末」の下）においてであり、これは善助の口述である。マサタラン出帆後、20日あまりで薪水補給や交易品積込みのためにハワイに立寄ったおりの見聞が、ほんの数行ではあるが叙され、腰布だけで裸体の島民が、ヒョウタンを売りにきている様子を示したさし絵も付されている。この記事には編者岩崎の「此島の事は洋島紀事の部に詳にせり」という注記があり、その「洋島紀事」なるものをぜひみたいところであるが、はなはだ遺憾なことに、「洋島紀事」は欠本部分の第9巻に収められていることとなっており、みることができない。

なお、善助がハワイに立寄ったのは天保13年（1842）11月ごろのことである⁸⁾。

8. 天寿丸関係

(1) 船籍等

紀州日高郡菌浦，和泉屋庄右衛門持船，950石積，13人乗組。

(2) 遭難・漂流

嘉永3年（1850）正月9日（一説には6日）。

(3) 帰国

嘉永4年（1850）12月28日（5名）および嘉永5年（1851）6月24日（7名）。

(4) 太平洋での停泊または滞在地

オアフ島（ハワイ諸島）およびギルバート諸島。

(5) 経緯

紀州から江戸へ蜜柑を運んでの帰路、伊豆小浦沖で暴風雨に遭い漂流におちいる。嘉永3年3月12日（一説に19日）アメリカの捕鯨船に救助される。しかし、その後洋上で他の2隻の異国船にそれぞれ8名、3名が移され、もとの捕鯨船には2名だけが残る。この船は同年9月4日ホノルルに寄港、漂民2名ともここで下船。このオアフ島でさきに洋上で別れた3名の者と合流できたほか、ジョン・万次郎ら土佐の漂民4名および榮寿丸の漂民でマカオへ送られる途中の善助にもあう。しかし、一同一緒の帰国はかなわず、天寿丸の5名はアメリカ捕鯨船に便乗して嘉永3年10月11日（一説に11月15日）ホノルル出帆、途中ギルバート諸島、硫黄島をへて嘉永4年2月上旬香港に着く。フランス船に乗りかえ、マニラ、上海をへて7月22日乍浦着。12月11日清

8) 榮寿丸の漂流一件についても、春名氏がゆきとどいた考証を加えて紹介している【春名1981: 167-216】。

国船に送られて乍浦を発ち、長崎に帰国したのは12月28日、長崎奉行所での吟味を終えて帰郷できたのは嘉永5年（1852）6月のことであった。

洋上で別れた別の8名の者も、病死者1名をだしたものの、カムチャッカをへて、ロシア船に送られ嘉永5年6月24日伊豆下田に帰国することができた。

(6) 史料

『通航一覽統輯』巻之九十八（魯西亜国部十五）安政3年（1856）（既出刊本第3巻 昭和45年刊、および荒川編『異国漂流記統集』に収録）

「漂流民話」

「漂流客談奇」

が収められており、これにオアフ島、ギルバート諸島の記事を見ることが出来る。このほか、ロシア船で伊豆下田に帰国したグループについての韭山代官江川太郎左衛門名による、幕府あて届書なども収録されているが、当然ながらこれらには太平洋諸島記事はない。

上の両書は、漂流から帰国までの経過と漂流民の見聞を叙しているが、「漂流客談奇」のほうがいっそう詳しい。前者の触れていない硫黄島（当時無人島）についても、わずかながらも記事がある。オアフ島については、1カ月あまり滞在したため、やや詳しい記述がある。

問題はギルバート諸島である。両書とも「裸体島」もしくは「裸島」と書くだけで、ギルバート諸島のその当時の名称キングスミル・グループ、もしくはそれを思わせるような名称の記載はいっさいない。しかし、その島の位置をオアフ島から香港への途上で赤道直下にあるとしていること、当時の捕鯨船はギルバート諸島付近を漁場の一つとし、しばしばこの群島に寄港していること、さらに、アメリカの捕鯨船に乗組んで、日本人としてはじめてギルバート諸島を訪れたことのあるジョン・万次郎が、キングスミル・グループを「裸島と申候」（『東洋漂流客談奇』）、「裸島と申す所」（『漂流奇談』）と述べていること、また、万次郎の述べる「裸島」と天寿丸漂流民の見た「裸島」の島民習俗が、きわめてよく似ていることなどから、天寿丸漂流民が帰途立寄った「裸島」もしくは「裸体島」が、ギルバート諸島であることはまちがいないと判断されるのである。

「裸島」「裸体島」という名称は、もちろん、島民男女が全裸もしくはこれに近い姿であったところから生じた名称であるが、それは日本人漂流民がその印象によってかかってにつけた呼び名名ではなく、上記の万次郎の語り口からみて、当時のアメリカ捕鯨船員のあいだに通用していた、キングスミル・グループ（ギルバート諸島）のニ

ックネームもしくは俗称であったと思われる。

なお、「漂流船談話」および「漂客談奇」では、この「裸体島」「裸島」に注記して、マルケサス諸島もしくはこれに近い島ではないかとしているが、これは明かに誤りである。かつて若宮丸の漂流民津太夫らが、日本への帰国途上でマルケサス諸島に立寄ったことがあるが、彼らのみたマルケサス島民も裸体であった。その情報（この稿の若宮丸の項参照）にもとづいて憶測したものであろう。

『漂流船談書』木藤正明（編）嘉永6年（1853）（刊本は既出荒川編『近世漂流記集』に収録）

荒川本の底本不明。これにもオアフ島およびギルバート諸島の記事がみられる。ただし、ギルバート諸島について、「裸島」といった名称は用いられず、かわりに「ペキヤン」、「シリネム」という変わった名称がでてくる。残念ながら、この変わった名称の由来は不明である⁹⁾。

9. 永力丸（榮力丸）関係

(1) 船籍等

摂津兎原郡大石村，松屋八三郎持船，1600石積（一説に1500石積），31端帆，17人乗組。

(2) 遭難・漂流

嘉永3年（1850）10月29日。

(3) 帰国

安政元年（1854）7月22日（11名）および安政6年（1859）5月18日（1名）。

(4) 太平洋での停泊または滞在地

オアフ島（ハワイ諸島）。

(5) 経緯

江戸へ荷物を回漕しての帰路，志摩大王崎沖で暴風に遭い漂流。嘉永3年12月21日アメリカ船に拾われる。2月3日サンフランシスコ入港。ここにほぼ1年間滞在ののち，嘉永4年（1851）2月10日ごろ別のアメリカ船でサンフランシスコを出帆，帰国の途につく。閏2月14日オアフ島着。オアフ島到着の直前1名病死。オアフには約1週間停泊する。さらに西航を続け，4月2日香港着。しかし，ただちには日本への便船なく，アメリカ軍艦サスケハナ号で1年余を過ごすこととなるが，この間アモイ，

⁹⁾ 天寿丸の漂流事件について，高山純教授にたいへんユニークで緻密な研究がある〔高山1987〕。教授もまた，私とは別の論拠からではあるが，「裸島」をギルバート諸島に比定しておられる。

マニラ、シャンハイ等々を転々とし、嘉永6年(1853)4月22日ようやく清国の対日貿易基地乍浦に着く。これまでに帰国の困難を案じて3名の者がふたたびアメリカへもどり、さらに1名が別行動をとり、乍浦に着いてからまた1名が行方不明となり、けっきょく乍浦から日本向け便船に乗船できたのは11名であった。乍浦出帆は7月12日、同月22日に薩摩の羽島に着き、天草、樺島をへて7月27日長崎に入港するが、樺島で潮待ちをする間に1人病死し、長崎に上陸したのは10名であった。長崎で吟味中にさらに1名が病没し、すべての取調べが終ったときには、当初17名が9名となっていた。

他方、いったん中国までやってきながら、一行と別れてふたたびアメリカにもどろうとした3人というのは、彦太郎、治作、亀蔵の3名で、この彦太郎がのちのジョセフ・ヒコこと通称アメリカ彦蔵、日本名浜田彦蔵である。彦蔵は漂流の年、わずか15才の少年であった。

彦蔵ら3名は香港からイギリス船でふたたびサンフランシスコにもどる。嘉永5年(1852)12月はじめのことであった。以後3人はばらばらになるが、彦蔵は安政5年(1858)8月20日までアメリカにとどまり、この間にサンフランシスコ税関長の庇護をえて学校教育をうけ、カトリックにも入信し、帰国まじかには帰化して米国市民権をえている。いわゆる日系米人第1号である。また、日本人としてはじめて米国大統領(ピアースおよびブキャナン)にも謁見している。

アメリカ人となった彦蔵は、安政5年8月20日サンフランシスコを發って訪日の途につく。10月4日ホノルル着、翌安政6年(1859)2月4日まで同地に滞在。香港をへて上海に渡り、4月27日アメリカ軍艦ミシシッピー号上で初代駐日アメリカ合衆国公使ハリスに会い、神奈川領事館付き通訳に任命される。ハリスにともなわれて5月18日長崎着、任地神奈川への入港は5月30日のことであった。

なお、彦蔵とともにサンフランシスコにもどった治作、亀蔵の両人も、それぞれに彦蔵に前後して日本に帰国している。

(6) 史料

『通航一覽統輯』巻之百十六(北亞墨利加部十三) 安政3年(1856)(既出刊本第4巻 昭和47年刊。荒川編『異国漂流記統輯』にも収録)

荒川本によれば、この記事は「班節録」からの転載とされているが、刊本第4巻にはそのむねの記載がない。

記事は漂流の1人、播州加古郡本庄村の清太郎からの聞き書きである。清太郎は彦蔵ら3人と別かれて安政元年に帰国した11名のうちの1人である。漂泊の経過にそって

記述されており、サンフランシスコから香港に向かう途中、嘉永4年閏2月にハワイに約1週間滞在したおりの見聞が、ごく簡単に述べられている。当時はまだカメハメハ3世の治世である。

『長瀬村人漂流談』奥多昌忠（編）安政2年（1855）（刊本は既出池田編『近世日本庶民生活史料集成』第5巻 に収載）

池田本の底本は池田氏所蔵写本のよし。なお、池田氏によれば、同系統本は奥平家にもあるとのことであるが、池田本が上・中・下3巻から成るのに対して、奥平本は上・下2巻本という。

上述の清太郎と一緒に帰国した伯州河村郡長瀬村の利七が故郷に帰ってのち、その話を鳥取藩士奥多昌忠がまとめたものである。これでは船名が永力丸ではなくて榮力丸とされている。また、利七の名も、上掲の『通航一覽統輯』では与太郎とされていた。

上巻に漂泊の経緯、中・下巻はアメリカ、中国での見聞を主にまとめられているが、オアフ島関係記事が上巻と下巻とにあり、上掲清太郎のものよりはやや詳しい。しかし、いずれにしてもわずかである。

『漂流記談』敦齋小史堀熙明（編）安政3年（1856）（刊本は、新村出監修『海表叢書』第3巻 更生閣書店 昭和3年刊 に収載）

新村本の底本は、京都大学文学部国史研究室所蔵本。編者堀熙明の序文では3巻本にまとめたとされているが、京大本は2巻本である。堀熙明は鳥取藩士。前掲の利七の話をまとめたものである。聞取りは同僚諸子とともにしたと述べているから、おそらく上掲『長瀬村人漂流談』の編者奥多昌忠と同席だったことと思われる。事実、記事内容もよく似ている。奥多本では、漂泊の経過とは別に、中・下巻をもっぱら見聞記事にあてていたのに対して、この堀本では、全巻を漂泊経過にあて、そのなかに見聞も含めて述べているので、経過に関するかぎりは堀本のほうが詳しい。オアフ島記事は第1巻にあり、これも奥多本より詳しい。

なお、この本によれば、利七は幼名を与太郎といい、帰国後ふたび改名して文太という、と注記されている。

『播州人米国漂流始末』口書 安政3年（1856）（刊本は既出石井編『異国漂流奇譚集』に収録）

これは、彦蔵らと別れて安政元年に帰国した者のうち、播州出身者4名が、姫路の役所において再吟味をうけたおりの「口書」である。石井本の底本は不明。ハワイ記事では、上掲の諸史料が触れていなかったハワイ島民の服装について述べている。

『漂流記』彦蔵著 文久3年(1863)版行(つぎの既出各書に収録。石井編『異国漂流奇譚集』, 荒川編『異国漂流記集』, 同編『近世漂流記集』, 池田編『日本庶民生活史料集成』第5巻)

漂流記としては珍らしく木版本として版行されたものである。20葉のさし絵があるが、石井本ではこれがいっさい省略されている。彦蔵は日本への帰国途中で4カ月ほどホノルルに滞在しているので、ハワイ記事はこれまでの永力丸関係史料のどの記事よりも詳しい。その時代はすでにカメハメハ4世の治世となっている。

『アメリカ彦蔵自伝』全2巻 中川務・山口修(訳) 平凡社 東洋文庫13及び22 昭和39年刊

The Narrative of a Japanese; What he has seen and the people he has met in the course of the last forty years. 2 vols. の全訳である。発行年は第2巻が1895年(明治28)であるが、第1巻は不明。かなり後年に書かれたものだけに記憶のまちがいもあり、オアフ島に最初に立寄ったおりのことを述べた箇所では、そこをオアフ島のヒロ湾としている。ヒロ湾はハワイ島の港であり、これはホノルルとすべきところである。また、2度目にホノルルを訪れたときをカメハメハ3世の時代としているが、これもカメハメハ4世の誤りである。こうした多少の誤りはあるものの、簡単なながらも当時のハワイ王国の議会制度や言語事情が語られている¹⁰⁾。

文 献

相川広秋

1963 『日本漂流誌』 日本漂流誌刊行会。

荒川秀俊

1964 『日本人漂流記』 人物往来社。

1969a 『近世漂流記集』 法政大学出版局。

1969b 『異国漂流物語』 現代教養文庫, 社会思想社。

鮎沢信太郎

1956 『漂流——鎖国時代の海外発展』 日本歴史新書, 至文堂。

近盛晴嘉

1963 『ジョセフ=ヒコ』 人物叢書, 吉川弘文館。

1980 『ジョセフ彦』 日本ブリタニカ。

CHOLMONDELEY, L. B.

1915 *The History of Bonin Islands.* London: Constable & Co. Ltd.

ELLIS, W.

1969(1839) *Polynesian Researches*, vol. 4; Hawaii. Tokyo: Charles E. Tuttle.

春名 徹

1979 『にっぽん音吉漂流記』 晶文社。

10) 彦蔵については、ジョン・万次郎の場合と同様に、幾つかの評伝が書かれている [近盛 1963, 1980; 中川 1964; 春名 1982]。

- 1981 『世界を見てしまった男たち』 文芸春秋社。
 1982 『漂流——ジョセフ・ヒコと仲間たち』 角川選書, 角川書店。
 Howe, K. R.
 1984 *Where the Waves fall.* Sydney and London: George Allen & Unwin.
 池田 皓 (編)
 1968 『漂流』(『日本庶民生活史料集成』5) 三一書房。
 石川榮吉
 1984 『南太平洋物語——キャプテン・クックは何を見たか』 力富書房。
 加藤九祚
 1986 『北東アジア民族学史の研究——江戸時代日本人の観察記録を中心として』 恒文社。
 川合彦充
 1967 『日本人漂流記』 現代教養文庫, 社会思想社。
 1968 「漂流——太平洋で外国船に救助された日本船」 須藤利一編『船』ものと人間の文化史, 法政大学出版局, pp. 239-276。
 清野謙次
 1942 「異国漂流譚と人類学, 特に蕃談について」『東亜学』4。
 桑田透一
 1940 『鯨族開国論』 書物展望社。
 村山七郎
 1965 『漂流民の言語——ロシアへの漂流民の方言学的貢献』 吉川弘文館。
 中川 努
 1964 『日系米人第一号』 グリーンベルトシリーズ, 筑摩書房。
 中浜 明
 1970 『中浜万次郎の生涯』 富山房。
 成田和雄
 1976 『ジョン万次郎の一生』 中日新聞本社。
 小野忠重 (編)
 1942 『萬国渡海年代記』 双林社。
 坂本藤良
 1988 「ジョン万次郎の『アメリカ物語』」『坂本龍馬と海援隊』 講談社文庫, 講談社, pp. 184-224。
 高瀬重雄
 1957 「漂流記蕃談に関する考察」『史林』40(1): 45-57。
 高山 純
 1985 「神社丸の漂流民はどこにいたか」『帝塚山大学論集』48: 1-28。
 1987 「天寿丸漂流民の見たハワイとギルバート諸島」『帝塚山大学論集』58: 1-38。
 ワリナー, E.V.
 1966 『新・ジョン万次郎伝』 田中至訳, 出版協同社。